

國學院大學學術情報リポジトリ

〔研究ノート〕 『源氏物語』と『紅樓夢』における
女性達の愛情婚姻観の比較について

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 郭, 楊 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00001587 |

【研究ノート】

『源氏物語』と『紅樓夢』における 女性達の愛情婚姻観の比較について

A contrast of women's views on love and marriage in
The Tale of Genji and A Dream of Red Mansions

郭 楊

キーワード：源氏物語 紅樓夢 女性 愛情婚姻観

关键词：源氏物语 红楼梦 女性 爱情婚姻观

要旨

中国の『紅樓夢』は、『源氏物語』よりも七〇〇年以上も遅い時代に成立した作品であり、直接的な影響関係を想定することはできない。日本には、両者の関係性に興味を持つ人さえ、ほとんどいないだろう。しかし、『紅樓夢』は中国の最も有名な愛情小説であり、また『源氏物語』も日本で最も有名な恋物語であるため、『源氏物語』も『紅樓夢』も、恋愛を描いた物語として同じく優れており、比較文学の観点からは、十分に比較研究の対象になるものと思われる。

特に注意したいのは、両作品の社会背景についてである。『源氏物語』に登場する女性たちの多くは皇族や貴族であるのに対し、『紅樓夢』の形成時期は清朝の中葉であって、当時の中国は封建社会の真中であり、『紅樓夢』にも封建社会における貴族層の才女たちの様々な生活が描かれているからである。

『源氏物語』の浮舟は、人物像が盛んに論じられる一方、宇治十帖の主題の一端を担っていると見る立場から、一連の展開を「浮舟物語」と名づけて鑑賞する見方さえ成立するほどに、注目度の極めて高い女君である。片や、『紅樓夢』の秦可卿も、これを重視する余り、「秦学」なる研究領域が存在するなど、人物像の上にも似たものがある。また、日本国内には浮舟を「尤物」と認定する見方があるが、秦可卿の研究においても、これを「尤物」と説く考え方があって、二人を比較検討するための要件は揃っているとと言えるだろう。両者の相似点と相違点とを洗い出すことによって、それぞれの悲劇性の淵源について考察したいと思う。

摘要

中国小说《红楼梦》的成立时间与日本小说《源氏物语》相差七百多年，显然《源氏物语》和《红楼梦》之间并不存在直接的相互影响关系，在日本学术界也尚未有人对两者的相关性进行研究。但从比较文学的研究方法来考虑，《源氏物语》和《红楼梦》两部著作都是描写男女爱情的佳作，从这一层面上讲这两部小说非常值得进行对比研究。在研究时，我们需要注意的是两部作品的社会背景虽有所不同，但源氏物语中登

場の众多女性都是皇族及贵族家的小姐，《红楼梦》成书于清朝中期，当时正处于中国封建社会发生的鼎盛时期，《红楼梦》中也描述了封建社会贵族家的才女的多姿多彩的生活。

《源氏物语》中的浮舟、历来是研究者们热门研究对象，宇治十回中约有一半的内容围绕着浮舟展开，研究学者也发表出一系列有关“浮舟物语”的经典论断，是《源氏物语》所塑造的女性形象中非常鲜明的人物之一。相比之下，《红楼梦》里的秦可卿作为金陵十二正钗之一，红学研究学者们开创了《秦学》的研究，两者在所塑造人物形象上颇为相似。在日本国内，对浮舟的研究也不乏有“尤物”论，在中国国内对秦可卿的研究中也同样存在“尤物”论，因为从对尤物论的考察来看，两者存在对比研究的必要性。本文旨在讨论两者的相同及差异，并追溯其悲剧命运的必然性。

1. はじめに

中国での『紅樓夢』と『源氏物語』の比較研究の経緯から見ると、従来の研究者たちは主として中国文学や比較文学の分野に属しており⁽¹⁾、これらの人々は日本語の把握が十分でないまま、『源氏物語』の中国語訳を参照することによって、両者の比較対照を進めてきた。しかし、ここ二、三十年前からは、状況が変化してきており、日本語や日本文学専門の大学教師や大学生が、二つの作品の比較を、様々な角度から盛んに行うようになってきている⁽²⁾。

例えば、陳銳清氏の「《红楼梦》与《源氏物語》女性形象的比较研究」は、幾つかの組に分けて女性の人物造型の差異を分析している。例えば紫の上と薛宝釵、尤三姐と隴月夜などの比較により、比較の観点を女性たちの悲劇の原因などにまで掘り下げている⁽³⁾。また、羅麗文氏の『社会性別視野下—《红楼梦》与《源氏物語》的比较研究』の比較研究は、社会上の性差という視野から、女性の社会地位や悲劇的な婚姻状態を分析したものであった⁽⁴⁾。従来の論文は、人物像の分析の異同点を比較するだけで終わっていたが、上記の論文では、従来の人物像の分析に加えて、人物に対する社会の影響を受けている恋愛観や婚姻観までも触れている。これらは従来の『紅樓夢』と『源氏物語』の比較研究では手の届かなかった、女性たちの恋愛観や婚姻観に着目している点において新しい。

それら論文において、『紅樓夢』の秦可卿と『源氏物語』の浮舟は、常にペアにされて研究の俎上に挙げられている。秦氏の父親は「營繕郎」五品（五位）

の官吏であり、それほど地位は高くない。一方の、浮舟も八の宮という皇族の娘ではあるが、父親に認知されなかった子であるので、双方揃って社会的地位は低いと言ってよく、社会的地位のあまり高くない点が共通している。また、秦可卿と浮舟の二人は、人物造型の基本が「尤物」とであると主張する論文が散見され⁽⁵⁾、そこにも通ずるものがあると言えるだろう。これら両者の愛情と婚姻について、大きな時代の背景の影響をうけながら描かれている。その相似点と相違点とを洗い出すことによって、二人の悲劇性の淵源に遡ってみたいと思う。

2. 浮舟・秦可卿の惨めな人生の始まり

浮舟は、呼称に象徴されるように、幾多の挫折を繰り返して、落ち着かない人生を送った女性である。浮舟は、母親（中将の君）が八の宮の召人であったため、父親に認知してもらえなかった。そのために居づらくなった母親は、八の宮家を出て、別の男性（常陸守）の後妻となるが、皇家の血をひく浮舟に惨めな人生は歩ませたくないと思い、やはり中等貴族で、血統の悪くない左近少将という男性との婚約をまとめる。しかし、東屋巻には、

「他人の子持たまへらむとも、問ひ聞きはべらざりつるなり。容貌心もすぐれてものしたまふこと、母上のかなしうしたまひて、面だたしう気高きことをせん、とあがめかしづかると聞きはべりしかば、いかでかの辺のこと伝へつべからん人もがなどのたまはせしかば、さるたより知りたまへり、ととり申ししなり」⁽⁶⁾

とある。上記は、常陸守（実は常陸介）の実娘だと信じて浮舟との婚約を整えた左近少将が、実はそうでないと知って、媒を務めた人間に詰め寄ったのに対して、媒が言い訳をしている場面である。左近少将は、常陸守の財産を狙っており、相手が実の娘でないと、それが回ってこないと心配したからであった。果たして、左近少将はこの婚約を破棄し、浮舟の異父妹に当たる常陸介の実子に乗り換える。そして、左近少将は次のように語る。

「かやうのあたりに行き通はむ、人のをさをさゆるさぬことなれど、今様のことにて咎あるまじう、もてあがめて後見だつに罪隠してなむあるたぐ

ひもあめるを、同じことと内々には思ふとも、よそのおぼえなむ、へつらひて人言ひなすべき。源少納言、讃岐守などのうけばりたる気色にて出で入らむに、守にもをさをさ承けられぬさまにてまじらはんなむ、いと人げなかるべき」とのたまふ⁽⁷⁾

浮舟は継父常陸守の実娘でないことが災いして、左近少将との結婚が破談になるという悲しみを味わった。実父の八の宮に娘としての身分を認められなかった不幸が最後まで付きまとい、立場の落ち着いた浮舟の人生が続いているのである。

一方の秦可卿は、養業堂という施設から引き取られた子であった。しかし、彼の父親の秦業は現在、宮繕郎の職に在って年は七十に近く、夫人は早くに亡くなりました。当時、息子も娘もいなかったため、養業堂から男の子一人と女の子一人をもらってきましたが、なんと男の子が死んでしまい、女の子だけが残されました。幼名を可児といい、大きくなると、たおやかな器量、あでやかな風情の持ち主になりました。買家とちょっとした繋がりがあったものですから、縁組することになり、買春の妻となったのです⁽⁸⁾と述べられているように、その後は貴公子買春の妻となった。その意味では幸せであるが、夫は女遊びや酒に溺れていて、自分の妻を十分に愛せる人ではなかった。美貌で風流な秦可卿は、寂しさに耐えられず、義理の父買春と不倫の関係となった。可卿はこの恋に溺れたが、倫理的に深い負い目を感じて、天香楼で首を絞めて、自ら命を絶った⁽⁹⁾。

浮舟と秦可卿の二人は、同様に断ち切れない恋と倫理道徳との間の板挟みに苦しんで、決着をつけられない点で共通していると言える。可卿は愛を追い求めながら、倫理上の矛盾を感じて、その苦痛に耐えられず、死の道を選んだ。浮舟は、薫と匂宮という二人の貴公子との愛の板挟みに苦しみながら、最後に死ぬ決意をした。結果的に、浮舟は死なずに宇治院という場所で、横川の僧都に助けられる(手習巻・269頁)。だが、その救護は浮舟の望むところではなく、意志として選んだのは死ぬことだった。浮舟の方は僧都に救われて、秦可卿の方は命を絶ったが、浮舟本人は死を求めていたと考えられ、そこは浮舟と可卿と異なるものではない。ところで彼女たちを追い詰めた原因は、いったい何だったのだろうか。それを考える上で、彼女たちの生き方と、両者が生きた社会背景

を分析しながら、論を展開したいと思う。

3. 浮舟と秦可卿の人物像

3.1 形代の浮舟

浮舟の異母姉の中の君は、

「いさや、そのゆゑも、いかなりけん事とも思ひわかればべらず。ものはかなきありさまどもにて世に落ちとまりさすらへんとすらむことのみ、うしろめたげに思したりしことどもを、ただ一人かき集めて思ひ知らればべるに、また、あいなきことをさへうちそへて、人も聞きつたへんこそ、いといとほしかるべけれ」⁽¹⁰⁾

と言い、宿木巻の後半部で亡くなった大君と似ている浮舟の話を薫に伝えた。中の君は自分に向けられた薫の目を浮舟にそらせたいと思ったのである。浮舟は薫が憧れていた亡き大君と瓜^{うりふた}二つの異母妹だった。果たして、薫は、浮舟を宇治の八の宮邸に住ませ、夢中になったが、浮舟の身分が身分であるだけに、大切にすべき女性とは考えていなかった。浮舟は大君の形代^{かたしろ}⁽¹¹⁾、つまり身代わりとして、薫の愛情を受けながらも、身分差によって、正式な妻となることは難しかったのである。しかし、何度も運命に見捨てられた浮舟は、母親の中將の君以外に頼れる人がいなかった。そのために、薫の愛情への期待が強く、常に従順で、逆らうことがなかった。

平安朝の貴族男性たちは、上流意識の中で、多数の女性と関係を持つのは風雅の一種と理解していたらしい。だから、複数の女性との交流を恥じるどころか、むしろ誇らしい行為と考えていた。薫が浮舟を宇治八の宮邸に隠棲させたのも、匂宮がその浮舟に求愛してきたのも、多数の女性との恋が風雅であるとの発想を背景としている。匂宮の求愛は、いわゆる横恋慕である。浮舟は薫の恋の相手の一人であるに過ぎない。こうした貴公子たちが、浮舟程度の女性を正妻、あるいは唯一の恋人として愛情を注ぎ、専心するはずもないのである。実際に、匂宮には右大臣夕霧の美貌の娘六の君が正妻として存在しており、浮舟の高貴な異母姉中の君がそれと拮抗している状態だった。また、薫には今上帝の女二宮が降嫁しており、双方ともに浮舟ごとき女性は論外の存在だった。

もともとの浮舟の相手は薫だが、匂宮が横恋慕をして、これを奪おうと画策したのが話の発端である。浮舟は、薫の優しさと誠実さが好きだったが、情熱的な匂宮にも惹かれ、どちらかに決めることができなかった。薫は宇治から京へ浮舟を迎える準備として、御殿を新築していたが、計画を知った匂宮は、その薫を出し抜こうとして、借家ではあるものの、やはり別の御殿を調達していた。その結果、いよいよ浮舟にはどちらかに決めなければならない期限が迫ってくるのである。

しかし、浮舟は決心がつかず、ついに追い詰められて、次のように思う。

「親もしばしこそ嘆きまどひたまはめ、あまたの子どももあつかひ、おのづから忘れ草摘みてん。ありながらもてそこなひ、人わらへなるさまにてさすらへむは、まさるもの思ひなるべし」⁽¹²⁾

これは宇治川への入水^{じゆすい}を決心した心中であると推測できる。先にも述べたように、最終的に浮舟の命は助かる上に、作品の記述からは実際に入水したかどうか分からない。しかし、彼女が死の淵を覗くところにまで追い詰められたのは確かであった。そして、その根本的な原因は、浮舟と薫・匂宮三人の切るに切れない三角関係だったのである。浮舟の命は助かったものの、死ぬことを求めた点には注意が必要であると思われる。

3.2 秦可卿の絶望

一方、『紅樓夢』の方の秦可卿を見てみよう。秦可卿のことは以下、可卿と略す。この可卿は、太虚幻境^{たいきょげんきょう}という場所で、人間世界の感情を全て支配している警幻仙女^{けいげんせんによ}という女性の妹である。可卿は風流で美しく、おしとやかであった。心も優しく親切なので、まさに可卿が、

「これもすべてわたくしに福がないからです。これほどのお屋敷で、お義父さまもお義母さまも自分の娘のように可愛がってくださいました。おばさまの甥（買蓉）はまだ若いとはいえ、あちらはわたくしを敬し、わたくしもあちらを敬い、これまで口論などしたこともありません。ご一家の方々におかれましては、おばさまは申すまでもなく、他の方もまた皆さんがわたくしを可愛がり、仲良くしてくださいました。」⁽¹³⁾

と述べている通り、嫁いだ買^かという家の一族に好かれる女性として造型されて

いる。女中や下人どもも彼女を絶賛していた、という。

先にも述べたが、夫の賈蓉は貴公子風を吹かせ、女遊び、美酒、美食に溺れ、妻可卿の愛情の要求や寂しい気持ちには無関心だった。自分の妻を愛護できない男なのである。そのために、美貌で風流な妻は、寂しさに耐えきれなくなった。可卿は女好きの義父賈珍に狙われ、不倫の関係に陥った。この関係が賈珍の脅迫によって成立したのか、それとも可卿の方が望んだのかは、文脈上はつきりしない。秦可卿から望んだという論文や、賈珍に脅迫されたのが原因で秦可卿との不倫関係を持ったという論文も見られる⁽¹⁴⁾。作品の本文からは、可卿自ら望んだことで不倫の関係が成立したとされているように読める。この関係は、可卿の人生の最後までずっと続いた。ある日、使用人の焦大という人物の口によって、この賈珍との不義が暴露された。だが、二人の関係を知っている人は、焦大一人ではなかったのである。これは多くの人の知っている、いわゆる「公然たる秘密」であった。

可卿は精神の気高い女性である。それなのに、なぜ人倫に違背したのだろうか。また、賈珍との曖昧な関係がどのようにして始まったのかなどは、明らかでない。ただし、この不倫関係が、清らかな精神性を持つ可卿にとって、道徳的にも尊厳上にも大きな痛手であったのは確かであった。当時の中国女性の倫理観を代表する言葉に「三綱五常」⁽¹⁵⁾という概念がある。女性は男性に従うものとする儒学的な道徳観を基本とする考え方であるが、この思想に縛られていたはずの可卿は、当然夫を裏切ることにはできないはずであった。ところが、現実には、彼女は夫の賈蓉を裏切り、義父とみだらな関係を結んだ。そのような現実を抱えながら、相当長い期間を生き抜いた可卿という女性の精神力は、かなり逞しいものと考えないわけにはいかない。

しかし、さすがの可卿も、やがて体調を崩し、張太医という医師の診察を受けた。張大医は、物事の考え過ぎから生じる心の病と診断したが、このことによって可卿はスキャンダルの露見を恐れるようになり、「それがいまではこんな病気になってしまい、なけるものかというわたくしの気持ちはもうこれっぽっちも残っておりません。お義父さまとお義母さまの前で一日も孝養を尽くせないままです」⁽¹⁶⁾と述べているように、秦可卿も既に自分の病因や病状を分かっており、心理的な重圧がますますひどくなり、徐々に生きる気力を失った。

そして、死ぬこと以外に道はないと考えるようになる。つまり、死こそが可卿の魂を救済できる唯一の手段であったわけである。

4. 主観の考え方や客観の現状が恋愛婚姻観へ及ぼす影響

4.1 浮舟の悲劇

先に述べたように、薫は浮舟の身分を軽んじて、ぞんざいな扱いをした。「車、妻戸に寄せさせたまふ。かき抱きて乗せたまひつ。誰も誰も、あやしう、あへなきことを思ひ騒ぎて」⁽¹⁷⁾とあるように、薫は浮舟を抱いて、車で連れ出した。この時代、貴族の女性を邸から外へ連れ出すのは侮辱的な扱いと言える。

匂宮も同様であった。匂宮は薫を装って、寝ている浮舟に近づく。浮舟は近づいた男性が薫でないと気づき、「あらぬ人なりけり、と思ふに、あさましういみじけれど、声をだにせさせたまはず、いとつつましかりし所にてだに、わりなかりし御心なれば、ひたぶるにあさまし。はじめよりあらぬ人知りたらば、いかが言ふかひもあるべきを」⁽¹⁸⁾と思うばかりであった。匂宮が浮舟を軽んじていたことは、このことから明らかである。

薫には大君という最愛の女性があったが、既に亡くなっていた。薫は大君が亡くなったことで、ますます大君への思いが深くなったと言える。そんな時に存在を知ったのが、彼女にそっくりな異母妹浮舟であった。中の君は、大君の代わりとして、薫に浮舟を託す。ところが中の君の夫である匂宮が浮舟に目をつけ、浮舟と薫・匂宮との恋の三角関係が始まった。つまり、浮舟は薫という相手がいながら、匂宮という男性の強引な逢瀬により関係を持ってしまったことになる。浮舟の気持ちは二人の男性の間で揺れ動いた。そのことが薫に知れたことで、浮舟は追い詰められる。解決の道を見つけられず、浮舟は宇治川に身を投げることを決意する。

浮舟は異母姉大君の^{かたしろ}形代、つまり身代わりとして、薫の真の愛を獲得できたのだろうか。そのことを薫の以下の行動で判断したいと思う。薫は使者の報告を聞き、すぐに浮舟の上京を先延ばしにした。薫から見ると浮舟の身分は非常に低いものであったためである。匂宮が彼女に対してやりたい放題のことができた最大の原因もそこにあった。匂宮が浮舟を求めるのも、本気で愛している

ということではない。二人とも浮舟を生涯の伴侶にするつもりはなく、生活の面倒を見てやる程度の女性として扱っていた。

解決できない三角関係が行き詰まり、浮舟は死ぬ道を選んだ。しかし、宇治川に入水したはずの浮舟は、なぜか宇治院という邸の庭に倒れており、たまたまそこに来ていた小野尼君の兄横川僧都によって命を救われる。したがって、浮舟が入水したかどうかは、文脈上からは分からないのである。ただし、その時に浮舟は物の怪にとりつかれており、その後それと気づいた横川の僧都が、これを調伏して追い払った。

物の怪によって、記憶や人格を失いかけていた浮舟は、その調伏によって回復した。そのために、徐々に過去を思い出して、今に至るまでの経緯を振り返ることができるようになった。やがて、薫や匂宮とのことに思いを馳せ、俗世の空しさを痛感した。そして、浮舟は「尼になしたまひてよ。さてのみなん生くやうもあるべき」⁽¹⁹⁾と述べて、横川僧都に懇願し、これを導師に出家を果たした。浮舟を絶望に追いやったのは、身分の制限により薫、あるいは匂宮の正妻や側室になれなかった点だと言ってよいだろう。

4.2 佳人薄命の顛末

片や、『紅樓夢』の秦可卿はどうだろうか。

夫の賈蓉は結婚当初、妻の可卿に対する暖かい愛情を示していました。可卿の弟秦鐘のことも可愛がっていました。例えば賈の一族の有力者熙鳳^{きほう}が秦鐘に会いたいと言ったことなど、「賈蓉は笑いながらいいました。そういうことではありません。あの子は恥ずかしいがりやで、晴れがましい場所に出たことがないのです。おばさまには、どうかお会いになって怒らないでくださいね」⁽²⁰⁾

このように述べられていることは、弟に対する思いやりがあった明白な証左ともなる。この時期の賈蓉と可卿の夫婦関係は良好だったと言えるだろう。

先にも触れた焦大という使用人が酔っぱらった事件があった。秘密の関係を暴露されたのは、その時である。焦大は、「とんでもねえことに、いまやこんな畜生どもが生まれて来やがった！来る日も来る日も、犬を盗むは、鶏と戯れるは、灰の上を這うヤツは灰の上を這うし、わしが何もしらないとでも思って

いるのか？『腕が折れたら袖の中に引っ込める』ってわけだ！』⁽²¹⁾と口走った。以来、夫の賈蓉は妻可卿と自分の父との関係を疑うようになった。以後の賈蓉がどんな態度で可卿に接したかは、言うまでもなからう。良好な関係は、そのことで一気に悪化した。

やがて、可卿は自殺した。だが、その葬儀における夫の賈蓉と、彼の継母である尤氏の描写は殆どない。尤氏は可卿の不倫相手である賈珍の妻であり、このみだらな関係を人から聞いて、密かに知っていた人物であった。尤氏は嫁である可卿を可愛がっていたので、このおぞましい事実を直視できるはずはなかったものと推測される。

一方、夫の賈蓉も可卿の死によって何か裏切られたような思いを抱いていただろうと推測できる。ただし、先にも述べたように、その点の描写はない。この時点において、賈蓉の可卿に対する愛情は、残っていないように思われ、その代わりとして描かれるのが、父親賈珍の苦悩であった。実の旦那様が可卿の死には何も感じていない所や、不倫の関係にあった義父の苦悩である態度が、可卿の上に生じた悲劇的な人間関係を示している。

5. まとめ

『源氏物語』の浮舟は、薫・匂宮の二人の板挟みに苦しんだ挙句に、宇治川に身を投げることを決意したが、一命を取り留めた。浮舟は「尤物」と評されるが、注(5)の「左伝」に記載された「巫臣氏」と言う女性は「尤物」として、「禍」を持っている属性から見れば、「尤物」と冠された女性は、ほぼ惨めな人生の最後を迎えた。浮舟も悲しい運命を避けられないのは当然である。

実父の八の宮に実の娘と認められず、継父の常陸守においても実の娘ではなかったために、婿に望んだ左近少将は異父妹の「姫君」に奪われた。これが不幸の始まりだった。やがて、浮舟は異母姉中の君のところ身を寄せたが、そこで夫君匂宮に目をつけられて、おかしな三角関係に陥った。

このような関係に行き詰まり、浮舟は死の道を選んだが、横川の僧都という人物に救われた。浮舟は物の怪にとりつかれていたが、僧都はそれを調伏した。その時点で、浮舟は大方の記憶を喪失していたが、そのまま過去の出来事を全

て忘れてしまっていた方が、むしろ幸せであったかも知れない。だが、物の怪の調伏は、浮舟につらい過去を思い出させ、俗世の空しさを痛感させた。ついに、浮舟は出家した。だが、せつかく世を捨てながらも、浮舟の生存は薫の耳に伝わる。薫は半信半疑であったが、生存の事実を確認し、小野妹尼のところへ連絡を寄せた。むろん、夢浮橋巻の最後の部分で、浮舟は薫の使者をしている小君にあわず、薫を拒絶する姿勢を示している。それはおそらく、彼女の今後に不安定な人生が再来することを予見させるものであろう。身分に恵まれなかった浮舟は、薫や匂宮の伴侶にはなりえなかったのである。

一方、『紅樓夢』の可卿は儒学の理念に縛られた社会において道徳を冒した。中国の封建社会において、女性の名声は即ち潔白な貞操であり、それは傷つけられてはいけない重要な倫理であった。ところが、道徳に縛られていたはずの可卿は、意識的に踏み外したわけではないのだが、悲劇的な死を迎えた。

可卿の死の直接の原因は不倫だが、その根源は夫たる男性からまともな愛情を受けられなかった点にあるだろう。それは愛欲ではなく、信頼できる夫を持つことができなかった、という悲劇であった。儒学の道徳観は女性が男性に従うことを求めた。だが、その反面として、女性にとって信頼できる存在であることが、男性の義務でなくてはならなかったはずである。それなのに、儒学はその道徳観の片面だけを重要視して、女性にとって不公平な社会構造を作り上げた。一人の男性が多数の妻を娶り、女性は一方的に貞操を守って、寂しさに堪える。そのような社会構造のゆがみは、必然的に悲劇を生み出すことになる。可卿の辿った道は、そうした時代を生きた女性の苦悩の姿を象徴しているように思われる。

『源氏物語』の浮舟は身分の低さによって苦しみ、『紅樓夢』の可卿は儒学の道徳観によって死ななければならなかった。二人は、いわゆる「尤物」として周りの人々の注目を浴びながら、恋の自由さえ社会的な立場ゆえに制限されていたのである。その結果、まさに「佳人薄命」と言われるような顛末であるが、そうした悲劇へと二人を追いやったのも、可卿は儒学を重んじる社会、浮舟の場合は身分の制限という、女性の「性」や「愛情」を不平等なまでに制限する社会のあり方に根本があったことになる。二つの話は、女性の恋愛や結婚が不公平に制約された社会が、必然として悲劇を生み出す、というモチーフに反映

されている。その点において、書かれた時代も地域も大きく隔絶していながら、今回対象にした二つの作品には相通ずるものが感じられるように思われるのである。

注

- (1) 中文系や比較文学の専門に属する研究者たちのこと。中文系は中国文学を専門とする研究を行う専攻のことを指す。
- (2) ①張銅学 龍菊英 「『红楼梦』与『源氏物語』比较研究」『怀怀学院学报』2006年 33頁
②牛立保 「『源氏物語』与『红楼梦』人物形象的对比性研究」人文论坛 2013年 138-139頁
- (3) 陳銳清 「『红楼梦』与『源氏物語』女性形象的比较研究」[D]. 内蒙古大学、2007年3月9頁
- (4) 羅麗文 「社会性别视野下—『红楼梦』与『源氏物語』的比较研究」[D]. 南昌大学、2010
①劉心武 《秦可卿之死》 時代文学（下半月）2010年
②西野入篤男 「『源氏物語』と白居易の文学「長恨歌」と諷諭詩を中心として」 明治大学、2011年
- (5) 尤物の解説「左伝 昭公二十八年」
「夫有尤物、足以移人；苟非德义、则必有祸」楊伯峻注：“尤物、指特美之女。”
発表者注「尤物」は「凄く美しい女性を指している。」
左丘明著 郭丹、程小青 訳『左传』中华经典名著全本全译译丛 中華書局、2016年3月
- (6) 阿部秋生 『源氏物語』東屋卷 日本古典文学全集17 小学館、1976年、17頁
- (7) 阿部秋生 『源氏物語』東屋卷 日本古典文学全集17 小学館、1976年、18頁
- (8) 井波陵一訳 『新訳紅樓夢』 第八回 岩波書店 2013年 167頁
- (9) 賴振寅 《刀斧之笔与菩萨之心——秦可卿之死与曹雪芹的美学思想》红楼梦学刊 1999
(1) 122-137頁
また、注3の劉心武氏の《秦可卿之死》にも秦可卿の死因は天香楼で首を絞めたと論じている。
- (10) 阿部秋生 『源氏物語』宿木卷 日本古典文学全集17 小学館、1976年、438頁
- (11) 土居奈生子 『源氏物語宇治十帖』おうふう2005年、259頁
- (12) 阿部秋生 『源氏物語』浮舟卷 日本古典文学全集17 小学館、1976年、176頁
- (13) 井波陵一訳 『新訳紅樓夢』 第十一回 岩波書店、2013年、202頁
- (14) ①楊嵐清 梅培彦 《珍秦关系：真情关系—从秦可卿形象出发再论她和贾珍的关系》北方文学 2010年 181頁
②呂麗輝 《从秦可卿的葬礼看贾珍》牡丹江师范学院学报 2004年 33頁
- (15) 『日本国語大辞典』 第五卷 小学館、1981年、228頁
- (16) 井波陵一訳 『新訳紅樓夢』 第七回 岩波書店、2013年、18頁
- (17) 阿部秋生 『源氏物語』東屋卷 日本古典文学全集17 小学館、1976年、85頁
- (18) 阿部秋生 『源氏物語』東屋卷 日本古典文学全集17 小学館、1976年、117頁
- (19) 阿部秋生 『源氏物語』手習卷 日本古典文学全集17 小学館、1976年、286頁

- (20) 井波陵一訳『新訳紅樓夢』 第七回 岩波書店、2013年、143頁
(21) 井波陵一訳『新訳紅樓夢』 第七回 岩波書店、2013年、149頁

参考文献

- 曹雪芹 高鶚 『紅樓夢』第五回 人民文学出版社、2008年
曹雪芹 高鶚 『紅樓夢』第十三回 人民文学出版社、2008年
曹雪芹 高鶚 『紅樓夢』第七回 人民文学出版社、2008年、110頁
曹雪芹 高鶚 『紅樓夢』第八回 人民文学出版社、2008年、128頁
曹雪芹 高鶚 『紅樓夢』第七回 人民文学出版社、2008年、114頁
豊子愷 『源氏物語』 人民文学出版社、1980年
林文月 『源氏物語』 浮舟卷 译林出版社、2011年

